



十戒実践講座

第七章 盗んではならない。／功績を正しく帰しなさい。



盗んではならない。

旧約聖書 出エジプト記20:15



盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。

新約聖書 エペソ人への手紙 4:28



盗みをした男も女も、報いとして両手を切断しなさい。

クルアーン 5:38



神的なものと結ばれ、真理を知る人は、「私は何もなしていない」と考える。

バガバッド・ギータ 5:8



知恵や知性の一部でも、自分の力に帰そうとする者がいれば、天使たちは憤慨します。なぜなら天使たちは、自分のものでないものを自分のものとするのは、霊的な盗みの罪にあたることを知っているからです。

天界の秘義 4295:2

盗んではならない。／功績を正しく帰しなさい。

ずりが聖なる人に会えば、ずりは自分のポケットだけを見る。－パシバ・ハリ・ダス

自分のものでないものを取る。

あなたは、何かを盗んだことがありますか？盗みたいという衝動に駆られたことはありませんか？それは、家の中に不造作においてあるお金であったり、父親の札入れか母親の小銭入れにある数ドルであるかもしれません。友達の家にあるおもちゃや、駄菓子屋にあるチューイングガムであるかもしれません。そして、それはまた、より大きく、高価なものになってゆくかもしれません。それが何であれ、大きなものであれ、小さなものであれ、あなたが自分のものでないものを取れば、それは盗みを犯すなという戒を犯すことになります。

話は、自分が6才だったころに戻ります。祖父が小さな食料品店を営んでおり、小さなブリキの箱に小銭を貯めていました。それを、店から家に持ってゆくのが私の仕事でした。ある夕べ、それを持ち帰ったとき、クォーター硬貨を2枚ちよろまかしてしまいました。祖父にはだまっていました。愉快なことではなかったでしょう。

アフリカの小さな村で育てられた19才の参加者は、幼いころの盗みを思い出し、「病気」と見えています。

今より若かったころ、私は仲間を離れ、家のそばの畑に行っていました。さとうきびとスイカを盗んでいたのです。スケジュールさえ作っていました。月曜と水曜、そして金曜の9時が盗みの時間です。歌を歌うことで、仲間と連絡を取ります。さとうきびとスイカをたんまり盗って、食べました。余ったさとうきびとサイカは家に持って帰って、翌朝食べることができるよう埋めていました。これは病気です。今や、この病気が私を支配しており、こういつている自分がいます。「さとうきびとスイカを育てるため一生懸命はたらこう、そしてその後、家の庭にためておこう」。それが私の病気の解決法です。

「禁じられた果実」を盗もうとする誘惑は、エデンの園の話以来のもので、すべての文化に適用されています。次の例は、アメリカの大学生が、バイトで掃除をやっている家でオレンジを盗りたいという誘惑にかられた話です：

私が掃除している家の冷蔵庫に、実に見事なオレンジがありました。飲み物はいただきましたが、食べ物は頂いていません。普段は、オレンジがなくなると家の人が見張っていることをおそれて、そのオレンジを盗ろうとはしませんでした。しかし、今回は課題のために、盗みませんでした。

のどがからからで、疲れながら、オレンジが欲しいと考えつつ、帰りました。友人の家に寄り、オレンジのことを話すと、なんと今まで食べたことのないような見事なグレープフルーツを出してくれるのではないですか。なんか、とても報われたような気分です。

捕まりたくない、人を傷つけないと思って、盗まないのがたいいの人です。しかし上の例では、娘さんは戒の一つに反するから盗みませんでした。すると思いがけず、オレンジの代わりに、今まで見たこともないような素晴らしいグレープフルーツをもらったのです。

戒を守ろうと努力している人にはすべて、その途上でなんらかの報酬があります。その褒美は、行動のすぐ後であったり、この例のように形あるものではないかもしれませんが、必ずあります。この褒美は、明らかな自覚を伴う内的な自由であったり、守ったことで得られる平安であったり、立派にそして正直に生きたという自負であったりします。これらの内的な褒美は、約束の地で豊かに育ったくさんの「果実」のほんのわずかな例にすぎません。

これに比べて、神的秩序に反して生きるならば、外にも内にも、必然的な結論に直面します。次の文章は、凶器を使った強盗で有罪とされた男が、自分の最初の盗みで感じた良心の呵責を思い出しています。不幸なことに、年をとるにつれて、自分の犯罪を正当かする方法を見つけ出します。しかし、自分の罪をつくづく考えるにつれ、自分の良心は今でも自分を悩ましていることを告白します：

この戒を読んだとき、9才くらいのときに引き戻されました。自分のものでない物を、盗ったのはそれが最初だと覚えていま

す。眠っていても良心の呵責で落ち着かず、自分のやったことを白状しました。しかし長じるにつれて、盗みをはたらいたときいつも起こる罪の感情をねじ曲げる方法を身につけました。

どうやって？600ドルを盗んで、心に罪の意識がわき上がった時のことです。その夫婦がそんな額の大金を不注意に扱うから、そんなことになったんだ、どうせいつかはそうなるんだ、という具合です。どうだったって？それでも良心は痛んださ。

別の受刑者は、「火が燃えるよう」に、呵責の念が襲ってきたといいます。

本当に私は悪いことをしました。全くどんな家族か知らないところから盗んでしまいました。この家族から盗んだのは、物でしたが、実はそうではなく、生命であったのです。この人々に対する感情や自責の念を示すのは難しいことです。しかし心の奥底では、火のように痛み、燃え上がっています。私は、彼らの愛する物の一つを奪ってしまいました。

実は、この受刑者の悔恨は、奇跡的な治癒過程のはじまりでもありえます。自分の行ったことを心から後悔し、神に赦しを請い、自分の行動の責任をとろうとするたびに、本来の秩序へ帰る道を見出すことができます。そしてもう一度再び、約束の地の喜びを味わうことができます。神は、自分のものではないものを取ることを拒めば、幸福と平安を体験できるようになさっています。単に盗みを戒める命令を与えることによってでした。まるで神は、私たちそれぞれに、「盗むなかれ、盗むことで、自分自身から幸せを奪っている」と言わんかのようです。

わずかな盗み

この戒を広く適用するならば、盗みはいろいろなところで犯しうることがわかります。例えば、従業員への賃金を低くして、法外な量の仕事を強いる雇用者は、従業員から盗んでいることになります。安く支払うことで、儲けている雇用者は、自分のものでないものを手にしているのです。同じように、手抜きをしたり、わざとぐずぐずしたり、勤務時間をごまかしたり、いい加減な仕事をする従業員も、自分のものでないものを手にしているのです。彼らは、雇用者から与えられるにふさわしくない賃金を盗んでいます。退任した機関車の運転手の文です；

鉄道マンとしての経歴の中で、従業員が勤務時間を申告している期間がありました、ある車掌が、本来正しい勤務時間よりも2時間多く申告してきたことがありました。彼はとても信仰深い人でしたが、「金持ち」から盗んでも問題はないと思っていたようでした。彼は教会の助祭であり、そのとき彼は、集会の教職者とともにいました。教職者ともども、過申告は問題ないと考えているようです。盗みが許されているように神の〈みことば〉を解釈したことに、私はショックでした。

ビジネス界と同じように、学問の世界でも、自分のものではないものを手にする状況があることは同じです。例えば、テストでカンニングして、いい成績を得た学生は、級友から盗んでいます。彼らは、自分に属しないもの（成績）を得たのです。長い目でみれば、本来、自分の力でまじめにやっている学生たちに属さねばばならない、名誉・報賞・学位・職などを奪ってしまいます。

学問の世界で大きな問題の一つに、盗作の問題があります。12歳の文です。

僕たちは、学校で盗作について大いに語りました。先生は他の人の作品をコピーすべきではないといいました。そして、本からアイデアを得て、自分の言葉で書いてもいいが、そのまま本を丸写しにするのはいけないといいます。他の人が一生懸命やったことを写すのは、人の作品を盗むのといっしょだということです。

盗作を示す英語、"plagiarism"は、ギリシア語の"plagios"からきており、信用を裏切るといった意味です。生徒が本から情報をそのままコピーするのを、盗作だと気づいていないならば、きつい表現のようにみえるかもしれません。しかし、知りながら、そして欺こうとして他人の作品を写すならば、「信用を裏切る」がびつたり当てはまります。研究者が書類や論文を公にする場合、原作からの引用を明らかにせず、自分のもののように偽ったときに起こります。学問の世界で、他人の考えを盗み、自分のものとしてごまかすならば、それは「意図的盗作」となります。この種のまやかしをなす者には、厳しいペナルティが待っています。

しかし、盗作は学問の世界だけの問題にとどまらず、すべての職業に及びます。芸術・発明・それに創造と新しい概念の出版

にかかわる他のすべての人々は、他人の考えを盗んでいるかもしれないのです。そして、適切な原典の引用なしに自分のものとしているかもしれません。商標や著作権、特許の法律が政府によって備えられているのは、そうした理由からです。そうすることで元の考えが盗まれないよう保護しています。ことわざにあるとおり、「認めるべきときには、認めなさい」です。ある受刑者が、自分の描いたものではないポスターを自分のものとだと言おうとしましたが、踏みとどまった例です。

刑務所の健康フェア用に、友人とともにポスターを描いていました。フェアの当日、私は招かれ、そこにいる「しゃば」の方々の接待係をおおせつかりました。ポスターの話題となり、その作者を尋ねられました。作者は友人で、その場にはいません。ポスターの出来映えは見事です。自分が作者だと口まで出かかりました。しかしその友人の作品であると本当のことを言いました。彼のものであると認めたのです。この見事な出来映えの作品に対する賞賛を、盗みませんでした。

小さい子供たちは、なぞったり色づけしたりした絵を誇ります。作品を自分のものだと感じ、自分が描いたと認めてもらうことで喜びます。同じように小さな子供は、本から丸ごとコピーした知識を自分のものだと許されると、喜びます。人は皆、模倣から始めます。そして小さな子供は、自分の考えを十分に育てる機会がないため、その考えは必ずしも自分で作ったものでないことは理解することができます。しかし長ずるにつれ、その考えや他人の見方を吸収して、次第に自分の考えや意見を形成し、自分のスタイルを確立し、自分らしく表現してゆきます。そして今までよりも、自分の作品が「創造的で」「独自の」そして「自分のもの」のように感じてゆくことでしょう。

しかし事實は、自分のもっとも素晴らしい考えや、独創的な表現でさえ、たとえそれがいかに明確に表現されようとも、自分のものではないことに気づき始める時がやってきます。自分の作がいかにか自分から出てきたように見えても、ただ自分のもののようにしている「霊的な盗作」であると知ります。自分の考え出す輝かしい考えや、造り出す美しい芸術、そして行う素敵な振る舞いは、すべて自分ではなく、神が自分のうちで行っているものだと気づきます。

この永遠の真理は、偉大なすべての宗教で教えているものです。インドの聖典では、「神と結びつき、真理を知った人間は、『私は全く何もしていない』（バガヴァッド・ギータ 5:8）。新約聖書には、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」。(ヨハネ15:5)；「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません」。(ヨハネ 3:27)イスラム聖典にも同じ知恵があります：「天と地とにある凡てのものは、かれに属し、また服従は絶えずかれに対してだけある。…あなたがたの与えられるどんな恩恵もアッラーからである。」(クルアーン 16:52-53)。そしてスウェーデンボリイ著作にもあります。「天使たちは、知恵と知性を少しでも自己に帰そうとするものがあると非常に憤慨します；自分のものでないものを自分のものだと主張することは、霊的な盗みの罪を犯すことになることと知っているからです」(天界の秘義4295:2)。そのため、宗教指導者は常に、「神に栄光を」と言っています。私たちは功績を取るのではなく、渡さなくてはなりません。クルアーンにあるように、

それで、夕暮にまた暁に、アッラーを讃えなさい。天においても地にあっても、栄光はかれに属する。午后遅くに、また日の傾き初めに…かれは、大地を甦らせる。(30:17, 19)

健全な誇りと、不健全な誇り

この戒めでは、愛のこもった感情や、真の考え、そして優しい行いは、自分のものではないことを認めなければなりません。神に、功績を帰さなければなりません。神は私たちに、「いと高きところ」からやってくる、愛と知恵、そして役立ちへの情熱を委託され、私たちは、それを享受しますが、善と知恵を自らに帰する罠に陥らないようにしなければなりません。そうでなければ、自分の功績への不健全な誇りがすぐに育ち、優越感が頭をもたげ、他を愛する喜びを奪ってしまいます。「真の知識を持つ者は、誇りやうぬぼれから遠ざかっている。彼は優しい、寛容で、正直で、純粹である」(バガヴァッド・ギータ 13:7)。深く自己点検し、自分の偽りの神を見つけ出さないなら、他人の「罪深い」行いに怒り、元に戻されることになるかもしれません。自分にも同じような性質があることに気づかないならば、ひとりよがりの変な誇りをもってしまうからです。この種の誇りは自分を他人よりも優れたものとして感じさせます；それ故、これは克服せねばなりません。盗人であり、強盗であるからです。ある父親の文です：

今朝、13歳になる娘の大きな泣き声で目が覚めました。お腹が痛くて、一睡もすることができなかったそうです。私の心の声は、娘はオーバー過ぎだ、病気だからといって皆を起こす必要はないと言っています。「もっと利口にふるまえばいいのに。自分だったらそんなことはしない」と考えました。

私は、今、考えたことを、盗むなかれの戒の観点から、点検してみました。すると、誇りについて言われたことを思い出しました。娘

の苦痛に対して、自分の内に起こったのは、冷たく、非情な考えと感情でした。自分の心の頑なさ、独善的な態度に気づくとすぐに、心が和らぎました。事実、素直な同情心がわき起こってきたのです。自分がいかに間違っていたかに気づきました。自分の独善さが、実際に娘への純粋な同情心を奪っていたのです。

あるおばあさんが、タイプの仕事で傲慢な感情がわき起こったことを指摘しています：

あるタイプの仕事を、友人と私で半分ずつ行っています。自分の分の仕事に取りかかったとき、こんな考えが頭をよぎりました。「私は間違いなく、彼女よりうまくやれるはずだわ」。思わず、吹き出してしまいました！この考えは、全くおかしいわ、だって友人は素晴らしいタイプストだもの。「忘れてしまいなさい！」と心の中で言いました。すぐにこの考えはなくなりました。

しかし、数時間ののち、同じ考えが別の衣を装って戻ってきます。

数時間して、教会の礼拝用のピアノの練習をしていたとき、こんな考えが頭をよぎりました。「私は間違いなく、他のピアニストよりもこの曲をうまく弾けるはずよ」。ああまた、とんでもない的はずれで信じられない評価です。なにか傲慢なものが、自分の頭の中に植え付けられようとしているのは明らかです。しかし今度も、その土壌は、傲慢の種を拒否しようとしています。そんな身勝手な考えを認めても、楽しくなんかありません。ああ、神に栄光を！

以上でみてきたように、優越感と独善は、霊にとって不健全なものです。この種の誇りは、汚れた風呂の湯と一緒に、窓から抛り捨てなければなりません。しかし、「風呂の湯とともに、赤ちゃんを捨て」てはなりません。なぜなら健全な誇りもあるからです。健全な誇りとは、他の人々と同じように、私たちは神の子であり、神の像と似姿に創造され、神の力を通してこの世をより良いところにすることができる、というところからきています。これには、他人よりも良くできるということには全く関係しません。健全な誇りを持った人々は、自分を測るにあたって、いかに他人よりも優れているかではなく、私欲をいさかも持たずに人に与えるために、自分の身勝手さを乗り越えることができるか、これを基準とします。これと同時に、最初に神からいただいたものでなければ、何物も与えてあげることができないと認めます。こんな健全な誇りは、向上心に富んだ若き女優の文章に、以下のように表れています。

人生で今までなかったような、健全さがあります。きっとこの課題に取り組んだためだと思います。今週、私は演劇をやっていました。いい仕事ができるたびに、私は神に感謝していました。すると、そうすることでバタンスが保たれ、目の前にある仕事に打ち込むことができました。人を喜ばせるために、演じているということです。おかげで、自分ではなく、人により焦点を集中させることができます。人により届くことができれば、劇の中でよりうまく演じることができる機会を得、それはすなわち、神が私を通して働かれ、皆のためになるということです。自分に才能があり、それは主が私を通して働きになると考えるのが好きです。演じることが好きだからです。演じるのは得意だと思うのが好きですが、心の中では、ベストを尽くすのは、神の故であり、神が私を通して働かれるためだと知っています。主に栄光あれ！

卑下の本質

今まで指摘したように、すべての信仰は、「神なくしては、人は何もできない」と教えています。このわずかな真理を認めることが、霊的成長の礎です。心からの卑下なしでは、人は傲慢になったり、謙虚になったり、そして再び傲慢になるという、終わりのない循環に囚われてしまいます。人が霊的な盗みを働き、神に属するものを自分に帰するならば、繰り返し繰り返し、それもさらに深い霊的な試練を受けます。それは、真に卑下することが何故か学ぶためです。この霊的試練は、つらく苦痛に満ちた体験となるでしょうが、霊的成長にとっては必要で避けることのできないものです。次の文は、自分の息子を厳しく叱った参加者が、悲しみとそれに続く卑下の体験を語ったものです。

先週、10歳の娘が肩を痛めてしまいました。医者は掛け値なく大事に扱って、ゆっくり直せと言いました。娘のまだ幼い兄が腹を立てて、強く押しつけました。肩をひどく痛めるほど押したのです。娘は地べたに倒れ、泣いていました。私はたちまちかっとなりました。息子に向かってつかかり、シャツの襟首をつかみ、娘のもとに引きずってきて言いました。「自分のやったことを見ろ！自分の妹を見てみろ！」ものすごい見幕でした！

これはとても、講座どころではありませんでした。それは愛から出たものではないと知っていました。神の助けがなければ、戒を守る力など自分にありませんとわかりました。なんとか事はうまくいったものの、自分は立ち直れないでいます。希望もなく、弁解のしようもなく、全く力もありません。私はこの経験で、本当に謙虚になっています。

この参加者が経験したように、神の絶えることのない助けと支えがなければ、人はどの戒を守る力もないとわかることができるのが、そんな時です。この種の「失敗」を体験することが、すべて失敗であったとはいえません。皮肉なことに、そして逆説的ではありますが、このような失敗は、間違いなく成功の印です。なぜなら、それを通して人は卑下の本質を学ぶからです。スウェーデンボリイが書いています。

人が試練に勝つことに意義をおくなら、試練によって人は救われません;というのは人が自己を愛するが故に試練に意義を認めるなら、他の誰よりも自分は天界にふさわしいと考え、得意がるからです。そしてそのとき同時に、自分は卓越しており、自分に比べると他人はたいしたことがないと軽蔑するからです。

人が真に勝利する試練とは、自分よりも他のすべての人に価値があり、自分は天界に向いているというより、地獄に向いているとの考えを抱かせるものです。そのため、試練の中では、人にそんな思いがつかまといます。

試練の後で、これに反する思いがあるなら、その人は勝利していないという証拠です。・・・その人は同じような、あるいはさらに悲惨な試練を体験せねばなりません。それは自分が何物にも値しないと信じる健全さに帰るまで続きます。(天界の秘義2273)

「健全さに帰る」という言葉は、「謙虚さに帰る」とも読めます。「どん底に行き着く」ことがあります—これは自分にいささかの力もなく、すべての力は神お一人からきていると知る時です。この時こそ、人が本当に健全な時です。神なしには人は皆「無力」であるという考えは、12段階プログラムの世界ではよく知られています。例えば、アルコール中毒のあるメンバーは、「我々は、アルコールに対して無力であることを認めます—そのため、自分の生活が手に負えなくなりました」と言います。そしてこれに加えて、「自分自身よりも偉大な力が、健全さを取り戻してくれる、と信じるようになりました」。

12段階プログラムであろうが、聖典であろうが、教えは変わりません。霊的成長の最初の段階は、自分自身に力がないことを謙虚に認めることです。イエスが山上の垂訓を説いたとき、最初の話は、謙虚さについて語られました。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです」(マタイ5:3)。同じようにイスラム教の信者も「頭を低くして門を入れ。」(クルアーン7:161)、そして、「アッラーにひれ伏せ、そして服従を誓え・・・人目のないところでも、朝も夕も」(クルアーン13:15)。次の文は、イスラム信仰を持つ受刑者が、自分のニコチン中毒に対して全く無力であることを謙虚に認めたものです。

たばこ。永遠に煙草をやめることのできる鍵は何だろう？自分が禁煙しなければならないのはわかるが、これを守るのは至難の業だ。今日、私は、自分一人では禁煙できないと受け入れた。助けが必要だ。自分の人間の意志では十分でない。私にはアッラーの神的な助けが必要だ。私は、彼の助けなしには何もできないほど弱いから。

この受刑者は、自分の無力と、人間の意志の限界と、アッラーへの全面的な信頼を語っています。彼は、ここでイスラム信仰の基本的信条を受け入れました。アラビア語で、「イスラム」とは「服従」を意味し、—特にアッラーの意志への全面的服従を意味するからです。この種の服従は、誇りの対極にあり;これが、卑下の本質です。

最初の試練

霊性の秘密の一つに、人は(いのち)を自分のもののように感じるように創られています—あたかも自分に由来するように—が、現実には絶えず、神からすべての(いのち)が流れ入っています。自分の愛情や、賢明な思考や親切な行いを、良く感じることに問題ありませんが、すぐそれは「自分」ではなく、神のものであると絶えず認めねばなりません。—なぜなら、神は、創造者であり、善いことすべての源であられるからです。今一度、この戒を振り返ります。それは「自分のものでないものを、とってはならない」と教えています。

次の例は、神からいただいた運動能力のことを、急にいわなくなった、ある受刑者の文です。

今日、ある人が私の球さばきがうまいと褒めてくれました。いつもの私なら、この褒め言葉を喜んで受け入れます。しかし今回は、神に功績を帰しました。「神の賜ですよ」、と言いました。それを口にしたとたん、その言葉は間違っていないと気づきました。とても気分良く、正しいと感じました。私は自分の世界にあるものを感じました—私は一人ではありません。神の賜であることを認め、感謝することで、(いのち)に新しい地平が開けました。呼吸する大気、暖かい太陽、そして日々めぐりあう無数の素晴らしい事はすべて

神の愛と配慮のおかげです。神を褒め称えよ。

「自分のものでないものをとる」ことには、長い歴史があります。それはエデンの園で、アダムとイブが自分のものでないものをとったことに遡ります。神は、アダムとイブに、園のどの木からも取って食べていいと言われます。－すべての木、ただし善悪を知る木を除いて。しかし蛇がイブに、「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる」(創世記3:5)と言って、禁断の果実をとって食べるようせまります。その木は、まことに食べるのに良く、目にうるわしく、賢くすると蛇が示し、イブは最初の試練に屈服しました。彼女は禁断の実を取って食べ、夫にも与え、夫も食べました。これは聖書に記された最初の盗みです。この不服従の結果、アダムとイブは楽園から追放されました。

この話には、いささか悩む部分があります。神は善と悪の区別を知らせたくないのでしょうか？これを教えるのが宗教ではないのでしょうか？親が子に教えたいことは、まさしくこれではないのでしょうか？皆がこれを求め、素晴らしい人物になろうと努力しているのではないのでしょうか？それなのに、なぜこの知識は禁じられたのでしょうか？

神が、為すべき善いことと、避けるべき悪いことを、私たちに正確に知らせたいのは、間違いないことです。そのため、書かれた言葉で啓示、「神の(みことば)」と呼ばれるものが与えられました。神の導きだけではなく、人が自分の心から出た、気まぐれで、移ろいやすいでっちあげを信じて、従わないように守るため、聖典は様々な形で与えられています。そう、善と悪の違いを知ることは、禁じられていないのです。禁じられたのは、「人が造りあげた神学」－神の啓示よりも人の判断に頼ろうとする企てなのです。神が啓示した(みことば)よりも、「自分の目にうるわしい」ものに(イブには、木がその目にうるわしく見えた)信仰をおくたびに、善悪を知る木から食べていることになります。神お一人に正しく属するものを、神から盗むことになります。人に理性が与えられたのは、神が啓示された純粋な真理－特に十戒－を確認するためであって、限られた認識や自分中心の欲から「人が造りあげた神学」を生み出すためではありません。

蛇はイブに、もしこの実を食べるなら、神のようになって、賢明で善悪を知ることができるようになる、と語りかけました。物質的な目的から霊的な事柄の知識を導いたり、「霊的悟り」を達成したりしてはならない、というのは明白な真理です。どんな実も、葉も、寺院も、儀式も、神聖な遺跡も、聖なる油も、そして人間の理性や想像力さえ、善悪の知識を与えてくれることはできません。それができるのは聖典であり、自ら進んでそれを受け入れ、理解し、戒を守る努力をすることで得ることができます。それ以外の手段で善悪の知識を得ようとするのは、「夜に盗人のように」入ることに他なりません。新約聖書にあるとおりです。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらなくて、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です」。(ヨハネ10:1)

中年のアフリカ人が書いた次の文は、彼の高校時代の説得力に富んだ経験です。「ほかの所を乗り越えてくる」いい例となっています。

高校生だったころスポーツに熱心でした、特にサッカーです。私には唯一の弱点がありました。マリファナをすわないと、調子が出ないという弱点です。それなしには、私はヘボ選手でしかありません。しかしマリファナをふかすと、私は向かうところ敵なしです。

他の分野では、授業で活躍しました。特に数学です。友人は幾何の知識で、私は代数の群を抜いた成績で尊敬されていました。二人ともマリファナを吸っていましたが、授業の時は別です。ところが、期末試験で、最初の数学の試験の前にマリファナを吸ったらどうなるか、一回試してみようと思いました。皆、私たちに注目しています。そして、一杯吸ってみることにしました。教会の礼拝に出席するのも忘れて、たっぷり吸いました。驚いたことに、3時間の試験を、私は15分で、友人は20分で終えてしまいました。結果は300点満点中、私が20点、友人が30点でした。それから二人ともマリファナをやめました。

この若者たちは、マリファナの力によって、並はずれた力を発揮し、数学の試験で素晴らしい成績をとれると信じるようになっていました。本当に間違った考えです！

私たちも、「自分は知っている」と信じるたびに、大きく裏切られます。－特に霊的な事柄において。そして最後には、ただ神だけが善悪を見分ける力をもっておられる、と悟るようになります。この知識は、実際、聖典を通して私たちに明らかにされていますが、すべてを、明らかに知り、理解しうるかというそうではありません。それは直接太陽を肉眼で見るようなものです。もちろん、神の神秘に「入り」、そしてそれを永遠の時をかけてより深く理解してゆくことはできます。これは秩序に従って行わなければなりません。しかし自分がほんの限られたものしか知っていないと思うことは、暗闇の中でちらつく小さなろうそくを信じるようなものですが、それは実は天界の太陽なのです。スウェーデンボリイが書いています。「天使の中でもっとも賢明な者は、自分から出てくる英知などは全くなく、そ

してこれを認めることが、英知であることを知っています」。(天界と地獄280)

この戒により深く進むにつれ、「人の墮落」は、蛇が妄想に陥るよう誘惑して、その「餌食」となるごとに起こるとわかってきます。「自分は知っていると思」い、そして神のように、善悪を完全にわかるという、妄想です。この妄想の餌食となれば、物事をこれ以上ない現実感と明瞭性をもって見ているという、考えに惑わされることとなります。言葉を換えれば、自分は何が正しいか知っており、それを他の誰よりも知っていると思信することです。私たちは、「あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる」という蛇の予言を信じ始めます。マリファナを吸った若いアフリカンの文を読めば、この惑わされた状態では、自分の認識能力と力が、膨らんで見えるようになります。善と知恵、そして(いのち)そのままで、自分の内にあり、少なくとも木の葉の内にあると思信し始めます。この禁断の果実を食べることは、自分が神であると思信し始めることです。

謙虚に歩む

盗みに対する戒めは、自分のものでないものとはならないと言っています。店から支払いなしに物をとろうが、原典を明らかにせず他人のアイデアをとろうが、それは盗みです。自分に属しないものにとっています。同じように、慈悲深い想いや、高貴な考えが起こるとき、それを自分に帰すると、それは霊的な盗みです。間違いなく神に属する物を盗んでいるのです。

もっとも深い意味では、この戒は、「ほかの所を乗り越えて来」ないよう求めており(ヨハネ 10:1)、つつましく神のみもとに行き、生き方への靈感や方向性を祈って求めなければならないことを語っています。自分の尊敬する宗教の聖典を読んで、心で吟味すれば、より明らかな認識に至ります。しかし、そのような時でさえ、「鏡にぼんやり」としか見ていません(コリント人への手紙 I 13:12)。私たちは人間であり、限られた存在です。私たちは、いつかより完全に見ることのできるものの、一部を見ることができないにすぎないのです。それ故、この戒では、神の(みことば)に信頼を置き、謙虚さを養い、神に功績を帰さねばなりません。旧約聖書の言葉です。

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。
 主は何をあなたに求めておられるのか。
 それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、
 へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。
 (ミカ 6:8)

課題:功績を正しく帰しなさい

この戒では、盗むなかれと言われています。「自分のものでないものは、とってはなりません」。物であれ、アイデアであれ、他人のものにとってはなりません。より深く、神のみが(いのち)を与え、神なしには何もできないことを認めなければなりません。自分は愛と知恵の源ではなく、それはすべて、神から惜しげもなく与えられている賜なのです。それゆえ、功績を正しく帰する人になりましょう。感じる愛情や考える高貴な考え、行役立ちはすべて神に帰します。この戒を守りましょう。盗んではなりません。

課題

功績を正しく帰しましょう。

物質的にも霊的にも、盗んではなりません。

この戒を守ることによって得る体験を、文として記録しましょう。

より深い考察と適用へのヒント

瞑想:「私たちが試みに会わせないで」

これは他の人間よりも自分はよく知っているという傲慢な考えに陥る、絶えざる試みがあります。これは神から盗み、神の英知を自信に帰するものです。これは戒を守りながら、「私たちが試みに会わせないで」という文句を使って瞑想しましょう。そうすることで、傲慢にさせようとする試みを退け、自分の(いのち)に慎ましさを加えましょう。毎日、数分「私たちが試みに会わせないで」という文句を心に置いて、功績を自分のものとせず、正しく帰することに思いをはせましょう。

文章作成

自分が何か盗んだことを思い出します。—自分のものでないものをとったことです。その出来事を書いてみましょう。そのとき、どう考え、何を感じましたか？今はその出来事をどう感じますか？違いがあるなら、書いてください。

活動:「菓子箱からクッキーを盗んだのは誰？」

週の間、会社から切手をとることであれ、家の菓子箱からちよっとお菓子をつまむことであれ、物をとっていないか注意してみてください。そして、微妙な盗みがないか注意してください。例えば、両替や買い物で、余分な釣り銭をもらっていないでしょうか？「自分のものでないものをとろう」という欲に気づいたとき、これを乗り越えてください。盗んではなりません。

活動:自分は「すべてを知っている」という性向がないか、見極め、それを制御します。

慎ましさへの最初の試みが、禁断の果実を盗み、「神のようになって、善悪を知る」ことであったことを思い出してください。自分の中に「すべてを知っている」という性向がないか、注意してみてください。会話の中で、どう人に接しているか、よく気をつけてください。自分がわずかしら知らないことを、あたかもよく知っているように語っていませんか？謙虚さがありますか？自分の意見を出す前に、「私はこんな風にしか見えません」、「私の考えでは」、「間違っていますか？」、という言葉をつけ加えていませんか？今週は自分の会話に気をつけてみましょう。教条的に、そしていかにも権威があるように、話してはいませんか？まるで「神のように善悪を知る」という風になるまで。

活動:会話を盗まないように

他人がまだしゃべっているのに、自分の言うことを「口の中で準備する」癖があればやめましょう。心をこめて聞いてあげましょう。相手の話を遮らず、休みを「盗まず」、会話に対してコメントを挟もうと割り込まないようにすることを学びましょう。相手の話が終わって、その応えを返すまで一息おいてみるようにしてみましょう。相手に話すチャンスを十分与えて、その間静かに神に栄光を帰します。

活動:他人の功績を正しく認めましょう

人に正直に認めることができるものを探し、その業績や行っていることを認めてあげましょう。功績を正しく認めましょう。人を褒めるのを惜しまないでください。あなたの番になれば、静かに神を讃えましょう。

活動:神に正しく功績を帰しましょう。

自分のうちにわき上がる、高慢な考えや感情に注意してください。そして高慢なコメントをしないようにしましょう。自分の宗教の習慣に従って、自分でこう言う習慣を身につけましょう、「主をほめたたえよ」、「神に栄光を」、「イエス様、ありがとうございます」、そして「アッラーのみが聖なり」。すべての栄光は神にあることを、思い出してください。